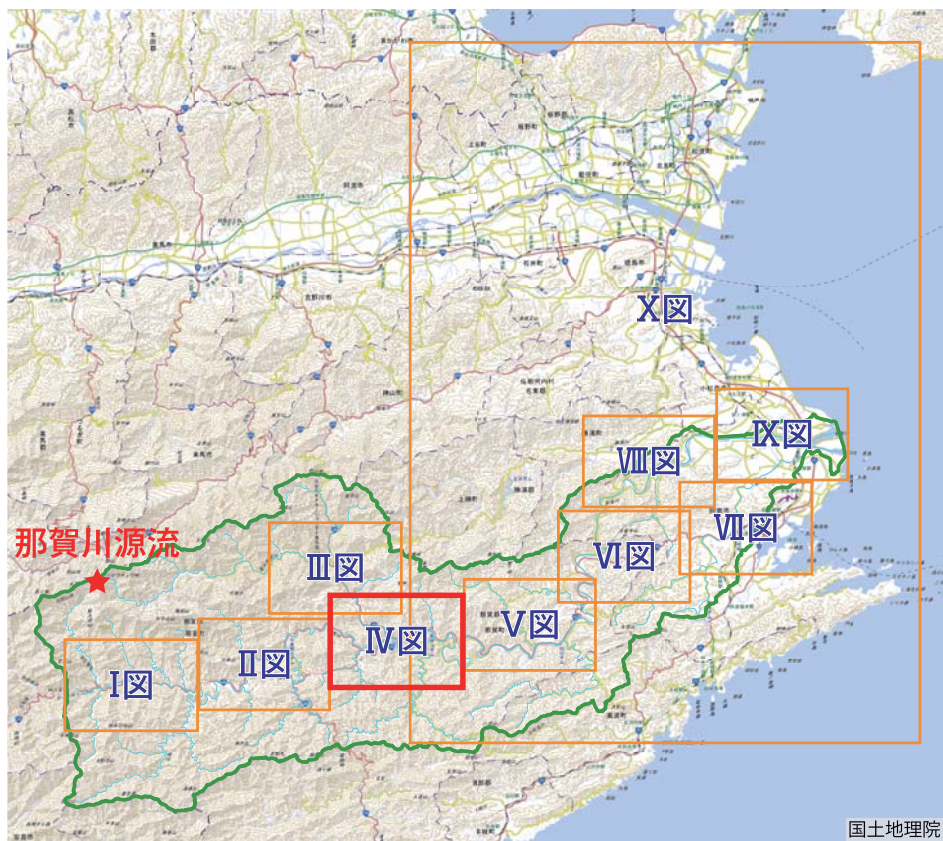


那賀川の風土を巡り訪ねる

第4号

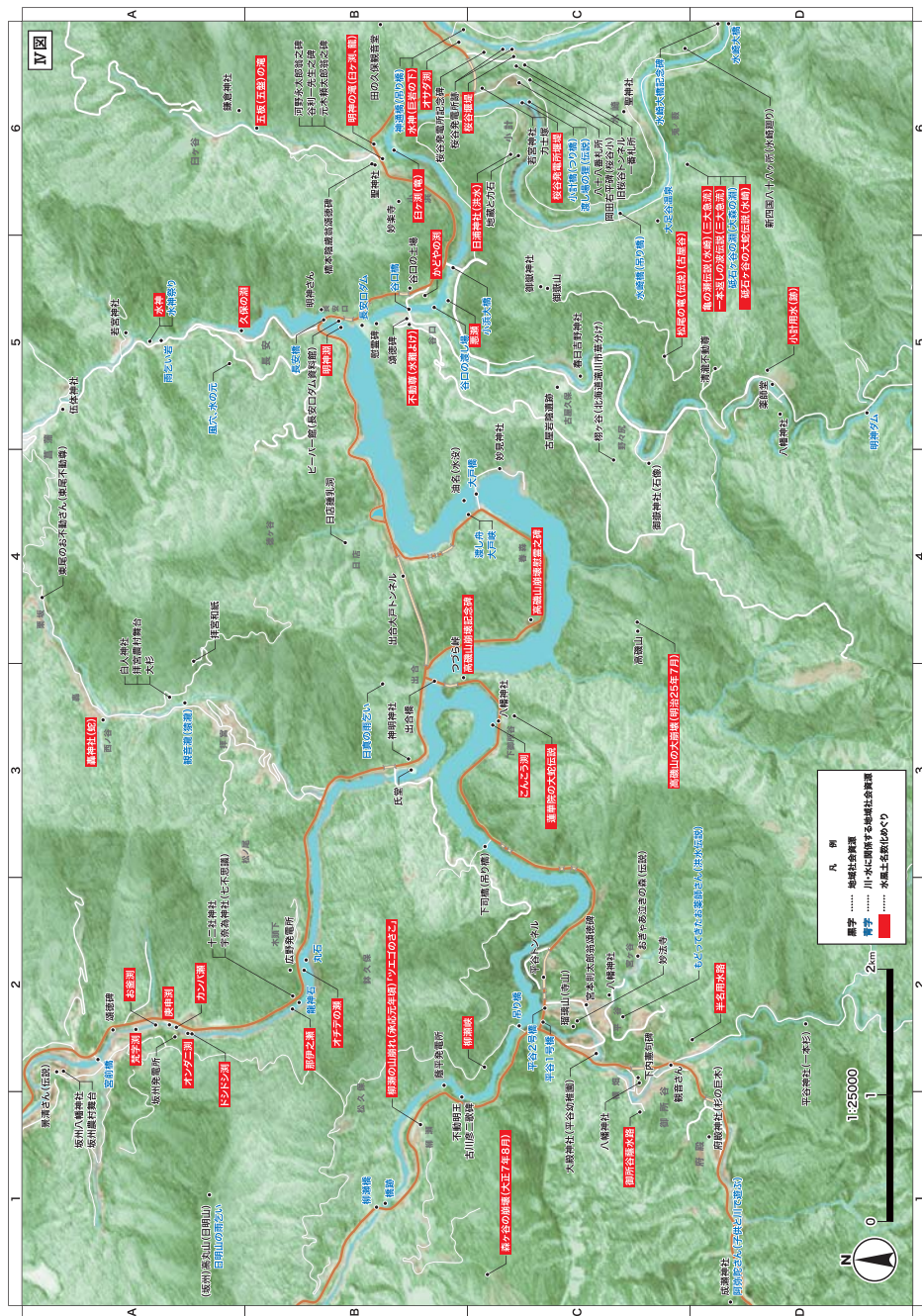


ゆきかう那賀川推進会議



図番号	タイトル
I 図	那賀川上流と高の瀬峡
II 図	杉とユズの里・木頭
III 図	坂州木頭川と名瀑の里
IV 図	長安口ダムと高磯山の崩壊
V 図	大蛇伝説と瀬淵の物語
VI 図	仁宇谷の歴史と鷺敷ライン
VII 図	桑野川流域と津峯山
VIII 図	那賀川・水害の記憶
IX 図	那賀川河口と治水・利水の跡を訪ねる
X 図	徳島の海岸津波の伝説

長安ロダムと高磯山の崩壊



第4章 長安口ダムと高磯山の崩壊

◇長安口ダム

IV図B5

本体・貯水池ともに徳島県最大



▲長安口ダム

那賀川の長安地先に洪水調節、発電、灌漑用水の補給を目的として昭和31年1月に建設された那賀川総合開発の一環をなす重力式コンクリートダムです。

【那賀川コラム】

戻ってきたお薬師さん

IV図C2

高磯山崩壊にまつわる洪水伝説

高磯山が大音響とともに山崩れを起こし、荒谷、春森の65人の命を奪いました。15戸の人家を埋めた土砂は、対岸の春森の方までせりあがり、堰き止められた那賀川の水位はどんどん上がり、上流の平谷、大殿から西ノ内まで水の被害をうけ、150戸余りの家が流失しました。平谷の薬師堂は水に浮き、逆流してくる水に上流の平谷の八幡社あたりまで流されていましたが、高磯山の堰がくずれ水が引き始めると、薬師堂は引くのに合わせて流れ、元の位置におさまったと伝えられています。

◇高磯山崩壊記念碑・慰霊之碑

IV図B3, IV図C4

天然ダムを形成した明治25年の大崩壊

つづら峠は、高磯山の崩壊によって作られた土砂ダムの水位が、この峠にまで達し、被災者の救助の拠点となり救助の舟が行き来した場所で、高磯山崩壊記念碑が建っています。この碑の台石が水位を示しています。また、対岸には高磯山崩壊から100周年を記念した高磯山崩壊慰霊之碑が建っています。



▲高磯山崩壊記念碑



▲高磯山崩壊慰霊之碑

◇柳瀬の山崩れ「ツエゴのさこ」

IV図B1

裏山に残る承応元年の崩壊

承応元年8月、柳瀬集落で山の崩壊による大災害がありました。今なおこの裏山の一部に「ツエゴのさこ」と称して、小規模の山崩れをおこす箇所があります。また集落の下はずれ那賀川に接する小字名に「ツエジリ」の呼称があり、蔭平発電所導水トンネル工事中、この付近で断層による出水に遭い、工事が難航しました。この工事中に長く埋没していたと思われる木材の断片が発掘され、語り伝えられた遠い昔の天災が偲ばれたといえます。



▲蔭平発電所



▲柳瀬集落

◇森ヶ谷の崩壊

IV図C1

大正7年に起きた裏山の崩壊

大正7年8月30日未明、28日より降り続いた豪雨のため、姥ヶ谷部落裏山の通称森ヶ谷の中腹崩壊により、高さ200m余りからの土石流で、住居1棟が倒壊し、数名が死亡する災害がありました。

◇五盤(五板)の滝

IV図B6

人目につきにいが町内屈指の名瀑

那賀町役場上那賀支所の少し東側、町営グラウンドから臼ヶ谷地区に至る車道を登ると、集落のかなり手前の谷側に広い待避所があり、五板の滝の中で最も高い「下の滝」がこの下にあります。

下の滝は落差10mあまり、広くて深い滝壺です。規模はさほど大きくないですが豊かな水量を誇り見応えのある滝です。

滝口へは、待避所から山道を下り、滝の対岸へ渡ってからしばらく進んだ所にある沢を下ると着きます。

「五板」という名は、本来この谷に懸かる「5番目」の滝という意味で、この上にも「上の滝」をはじめ、いくつか小さい滝が連続しています。



▲五板の滝・下の滝

◇日浦神社

IV図C6

洪水で流れてきた出所不明の祠

言い伝えによると、大昔的那賀川の洪水で、水の引いたあと、高張の川端の岩の上に祠がかかっていました。そのまま放置するわけにもいかず祀っているうちに、いつしか人々の信仰の対象となりました。流れてきた所に置いてあったため、洪水のたびに安全な場所へ移さねばならず、もっと安全な場所へ移転してはということになって、現在地へ移転したと言われています。



▲日浦神社

◇一本返しの波伝説

IV図C6

平家落人の生首が現れるという難所

那賀川上流で三大急流の1つに数えられる瀬。この瀬の特徴は、波が非常に高く1m以上もあるので、筏師や、舟で魚を取る人にはひどく嫌われていました。その上、この波間に血の滴る人間の生首が現れると言われており、波以上に物騒です。これは平家の落武者7人が久我の返し道と呼ばれるところまで逃げてきましたが、ついに追いつかれ首を撥ねられて下の川に蹴落されてしまい、その首が今も成仏できなくて迷って出てくるのだと言われています。

◇かどやの淵

IV図B5

旧上那賀町谷口の筏流しの起点

筏は2間(約4m)物の材木を8尺(約2.5m)の幅に並べ、これを針金(昔はかずら)で編み合せて1連とし、6連を組んで1組の筏としました。長さは13間、才数は約4,500才程でした。筏は前方よりハナ、ブ、モッコ、トモ、と言われる部位から成り、ハナとトモには舵(雉刀型のもの)をつけ2人乗りでした。前方ハナを川下に向け流れにしたがって下って行きました。流れのゆるやかな所は竹竿などで筏を押して速めて行きました。

筏流しの起点は、上那賀町谷口の「かどやの淵」でした。



▲かどやの淵



◇明神の滝

IV図B6

神秘の白ヶ淵に流れ落ちる明神さんの滝

白ヶ谷の下流、現在小浜集会所東の国道真下に、高さが15mぐらいの大きな滝があり、この滝の下に50坪余りもある神秘的な淵があります。古老の話によると昔はこの淵を白ヶ淵と呼んでいたそうです。

この淵には龍のようなものが住んでいるというので、近傍の者は恐ろしがって余り寄りつかなかったそうです。

この滝の上に、いつ頃かわかりませんが小さな祠が祀られていたそうで、それを近くに住んでいた森コシモという人が、大正初期に明神さんとしてお祀りするようになり、それから淵の名も明神の淵として世に知られるようになりました。



▲明神の滝

◇悪瀬

IV図B5

谷口下流の難所の瀬

雨期ともなれば一大難所であった谷口下流100mに悪瀬と呼ばれる瀬ができ、渡船場付近には毎年水難事故が絶えませんでした。このため、水難事故よけの祈願をして不動尊を安置したといわれています。



▲悪瀬

◇蓮華院の大蛇伝説

IV図C3

蓮華院を襲った大蛇

六、七百年の昔、下御所谷の対岸の花丸という所に蓮華院という庵があり、修験者が住んでいました。ある夜、蓮華院を7巻き半巻くほどの大蛇が襲い、修験者は今にもひと呑みにされそうになりました。修験者は日頃信仰している仏法の加護により、宝剣を抜き退治することができました。残骸は出合橋の下の淵に捨てましたが、7荷半(1荷＝天秤棒の両端にかけて1人の肩になえる分量)もあったそうです。今は、その場所は長安口ダムの湖底になっています。

◇松尾の竜

Ⅳ図C5

獵人が目撃した子竜と2匹の猪

秋も大分過ぎた頃、土佐の国から3人の獵人の名人が阿波の古屋谷という集落に猪を撃ちに雇われてやってきました。畑や野の芋類、栗などを目当てに、猪が里まで下りてきて荒らして仕方がないので退治して欲しいとここに呼ばれたのがこの3人です。

ところがこの古屋谷というところに山田某というひどく貪欲な金持ちがいました。彼は作物などが不作で困っている人をみると、その場は気前よく物を貸してやり、いざ貸したものを返せないと知ると、その代わりに農耕道具や土地をかたっぱしから取り上げて、そのために泣かされた人は数え切れないほど多くいました。

常吉も、この山田にかかって5反あまりの竹田にある田を取られ、その上隣にある茶畑も奪われてしまった被害者でした。山田は、竹田の田がよく実るところから、その横に続いている茶畑もよい田ができるに相違ないとして開墾して石ころや、茶の根株を古屋川で一番深いといわれる鎌の淵に捨てこの淵を埋めてしまいました。

さて獵人たちが猪の荒した土地を調べてみると、全部山田の所有のものばかりであるのに気がついたので、彼等はあの畑や野を荒す猪を射殺すのはいやじゃ、ここはひとつ山田をこらしめるために猪をほっておいてやろうと話を決めてその日の夕方帰ろうとしましたが、山田は獵人に酒も飯も食い放題飲み放題何でも思いのままにし、それに大金をにぎらせやと引き止めました。

さて翌日の夕方5匹の犬を連れて3人は出かけて行きました。すぐ猪2匹を犬が見つけ野原に追い出してきたので、自慢の腕で立てつづけに5、6発ぶっ飛ばしましたが当たらず、逃げてゆ

くので直ちに追いうちをかけましたが、結果は同じく当たらず、土佐の国でも三鉄といわれ彼等の右に出る者は絶対にはないほどの名人で、「今日まで百発百中なのにどうしたとか、こんな筈がない何かある」と思って足跡を犬に追わせて行きました。しかし途中「どうして失敗したかが気にかかる、わし等はあの心の悪い金持ちに食と金とで釣られ味方したので天の罰が当たったのじゃなかろうか」と1人が言い出す始末でした。

しかし何といってもこの場はあの2匹の猪を退治するのが先決問題とばかり、3人は1里も山奥に追って入り込んでしまいました。そこら一帯は松尾と言われるところで、猪が身体全体に鉄砲の玉や、矢が打ち込まれても通らないように松脂をつけにくるので有名でした。

ところで3人の獵人はそこで世にも珍しい光景に出会いました。榎(かや)と杉皮を巧に用いて丸くこしらえた巣の中に1匹の子供の竜と2匹の猪を見たのです。

その子竜が2匹の猪に、「父さん、母さん、わし等はまだあの鎌の淵の巣には帰れないの、早く帰って十分遊んでみたいなあ、ここは狭くて住めん」というと(親である)2匹の猪が、「まあ、もう少し辛抱なさい」と言っています。

犬はもう先ほどから毛を逆立て、尾を尻にはさんで震えています。3人の獵人はこの光景を見て青くなって逃げ帰りました。2匹の猪とは、あの鎌の淵に住んでいた竜で、巣が山田のために石ころや、茶株で埋められてしまったので松尾に逃げて、そこで猪に姿を変え山田の畑や野を荒しまわっていたというわけです。それで獵人は山田に、あの鎌の淵を元の通り掘り起こし無理に奪った土地を持主に返してやれば、あの猪はお前の畑や野に出なくなるであろうといって土佐にさっさと帰ってしまいました。

山田はしぶしぶ言われた通りにしました。それからというものは何事もなかったように平和な集落となったといえます。

◇亀の瀬

IV図C6

亀を投げ入れた川に大急流が出現

ある間抜けの泥棒が水崎1番の金持ちの家に入りましたが、あまり騒がれたので慌てて何の役にもたたないと思われる亀(甕)を台所から盗んで背負って、川伝いに川上の方に逃げてきました。しかし、はて今自分が背負っているものは重いが何だろう、とおろしてみると薄汚れた亀(甕)であったので、えいこんな物じゃまくさいといつて川の中に蹴込んでしまいました。

すると今まで静かに洋々と流れていた水面に急に落差ができ、大きな白波をたてるようになって、長さ200mにも及ぶ一大急流が出現し、その影響によって、下流に亀(甕)の底のように丸い大きな淵が掘れ一瞬のうちに川筋を変えてしまいました。

この亀(甕)には決して水を入れてはならぬ、もし入れるとすごい力で回転して手のつけられぬことになり、家運が傾くと言われたものでしたが、これは金持ちが自分の家の宝として台所に伏せて置いて、これで富を迎え入れ財産の出でゆくのを防ぐものとして大切に扱っていたもので、一名伏せ亀(甕)といわれ、ここの主人が今日のように金持ちになったのは、この亀(甕)のお陰にほかならないと評判になっている代物でした。

後でこの話を泥棒が聞いて、非常に残念がってじだんだ踏んでくやしがつて、ショック死したと言います。

◇柳瀬峡

IV図C2

かつては鮎の名所と言われた魚場

国道195号、平谷橋付近はダム湛水の境目にあたります。ここから上は鮎の名所柳瀬峡と言われた魚場で、夏場は賑わいましたが長安口ダムの完成で湖となり、今は魚場として楽しむ所がありません。危い崖壁の道は広い国道となり、トンネルがぬけて緩いコースに変わり、道路下に蔭平発電所がダム水面近くに建ち、昔の様子とは変わりました。

猿も鹿も通れない、断崖絶壁に点々と松や桜が今にも倒れそうに岩にしがみつきながら山頂まで続き、隣りは美しい人工造林の杉木立、紅葉の頃は鹿の声が聞こえそうなほど四季の眺めはよく、昭和10年県道改修記念に山桜を柳瀬トンネル付近に、また昭和43年蔭平発電所完成後その周辺に柳瀬集落の手で植えたソメイヨシノなどの数十本の春の桜は見事です。



▲柳瀬峡

◇御所谷蔭水路

Ⅳ図C1

防火水としても貴重な水路

この水路は、集落の西側を南から北へ流れています。水源については昔カートの上流で府殿川を堰止めカート廻りを迂回し、預りを経て白花向で現存の水路に接続していました。大正7年隣接の大殿集落まで延長する計画で、当時としては難工事であった笹ノ峠（現在の国道笹ノ峠隧道の下側）を隧道に改良しましたが、現在の横畑で中止しました。その後昭和11年より順次コンクリートに改良し、預り、御所谷・横畑の水田2.7haの灌漑用水を通す1,200m、幅50cmの水路となりました。また水路は年間を通じ通水しているため地区の防火水としても貴重な水です。



▲御所谷集落

◇半名用水路

Ⅳ図D2

集落の氏神の上流を水源として開削

御所谷集落の野村家に所蔵する文書によれば、明治16年丈ヶ谷川右岸に、灌漑用水路の開削を計画施工しています。

この工事の世話人代表は、丈ヶ谷集落の次原吉平、御所谷集落の日野浦繁蔵、平谷集落の松田堅太郎でした。

そして明治16年9月に着工し、同17年4月に竣工しています。用水路の延長は、約3,240m、幅は約1.27m、深さは27cmで、この内、樋が6カ所を合わせて36.36m、幅約36cm、深さ約27cmです。

この工事に要した経費は「人足七百四拾人三分貳厘但壺坪四人此賃数百八拾五円〇八錢壹人廿五錢」とあり、また樋については「此樋木九百拾壺材貳分五厘此代価四門五拾五錢六厘但壺才ニ付金五厘人足四拾人但壺間ニ付貳人此賃錢拾門壹人金貳拾五錢」とあります。したがって直接工事に要した経費は、199円63銭6厘であったことが伺われます。用水路の敷地に充てた面積は、4反1畝10歩でした。

このようにして当時としては大工事だったと思われる工事を、7ヵ月間の短期間に完成したことは、関係者一同の一致団結と、用水の取得に対する強い執念から、生じた賜物でしょう。

◇砥石ヶ谷の大蛇伝説 IV図C6

釣り上げられた大蛇のうろこ

水崎に大変深く川底の見えない淵があります。この付近一帯は砥石で磨かれたような表面が滑らかな石を敷き詰めようになっているので、「砥石ヶ谷」と呼ばれています。

今から150年程前、向中村の鶴吉という人がこの淵で丸い大蛇のうろこを釣り上げました。その後、大蛇のたたりか鮎は1匹も釣れなくなり、釣りに行くと何か災難があり、誰も近寄らなくなりました。またこの淵は、不思議なことに洪水で水が濁っても、ここだけは濃紺の水であったと言われています。

◇日真の雨乞い IV図B3

天狗岩で行われた雨乞いの儀式

別名大峯山とも言われる丈ヶ山という山があります。長安口ダム周辺にある日真集落の山頂にあり、頂上付近に天狗岩という岩があり、昔はここで雨乞いをしたと言われています。

また、松久保の日明山(高丸山)の頂上に広さ3畝程の平坦な場所があります。その昔、ひどい干ばつが続いた時、この山に坂州と松久保の人々が登って雨乞いをして、踊ったという話が伝わっています。

【那賀川コラム】

新四国88カ所(水崎廻り)

IV図C6

那賀川左岸に建ち並ぶ写し霊場

旧桜谷トンネル東口(音谷側)から那賀川左岸の町道7kmの水崎廻りをし、元のトンネル西口へ帰ってくる、その間に88の石仏が点々と祀られています。

88カ所めぐりをするには、相当の日時を要するため、誰でも簡単に巡拝することは困難でした。当集落は、旧桜谷トンネルを起終点として1周することができ、およそ7kmの行程です。そこで、四国に似た水崎廻りの地形を生かして、誰でも手軽に巡拝できるように、との願いから、水崎原の河野永太郎、兎ノ藪の高木勘五郎の両氏が発起人となり、造られたものです。

四国本島に似た水崎廻りの道はイタドリ・ゼンマイも生えフジ・ツツジも咲く、信仰と体力づくりを兼ねるによいことから、町主催の歩き歩き運動のコースになっています。



ゆきかう那賀川推進会議事務局

国土交通省 四国地方整備局

那 賀 川 河 川 事 務 所

徳 島 県 県 土 整 備 部

阿 南 市

那 賀 町